

41393

教科書文庫

4
8/0
31-1939
2000-0
22283

200030
2937

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

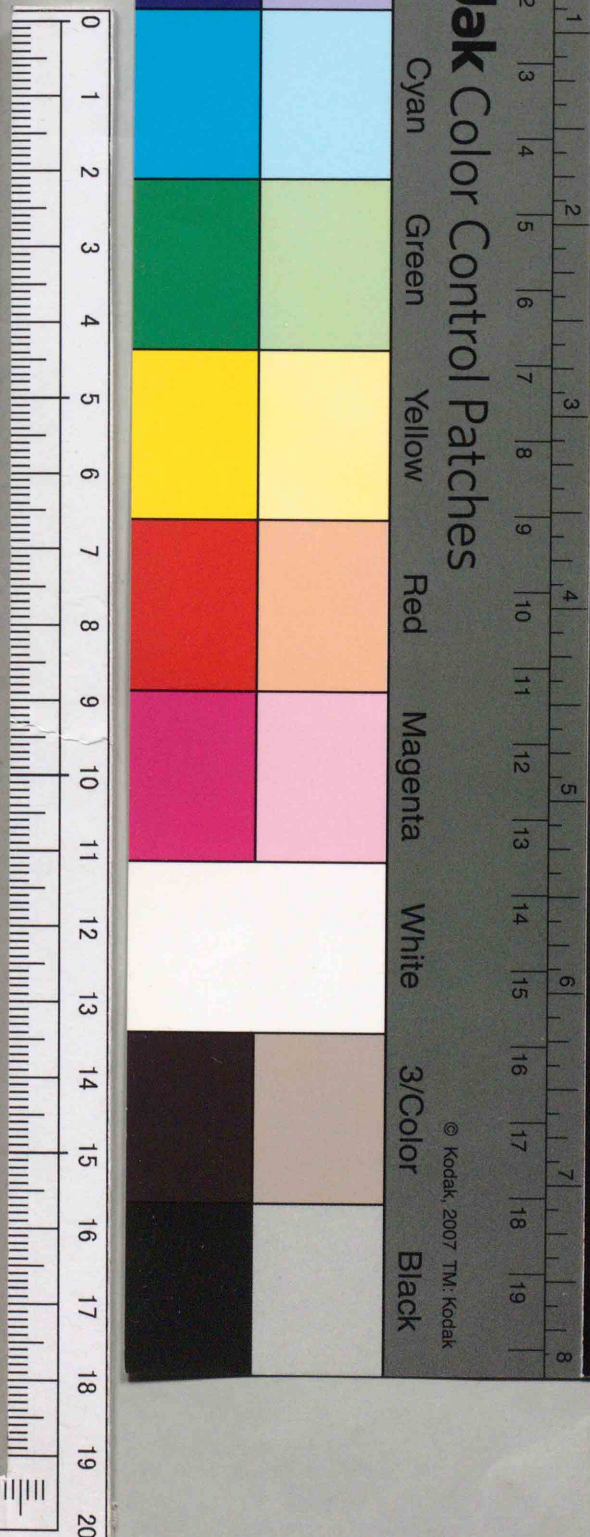


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



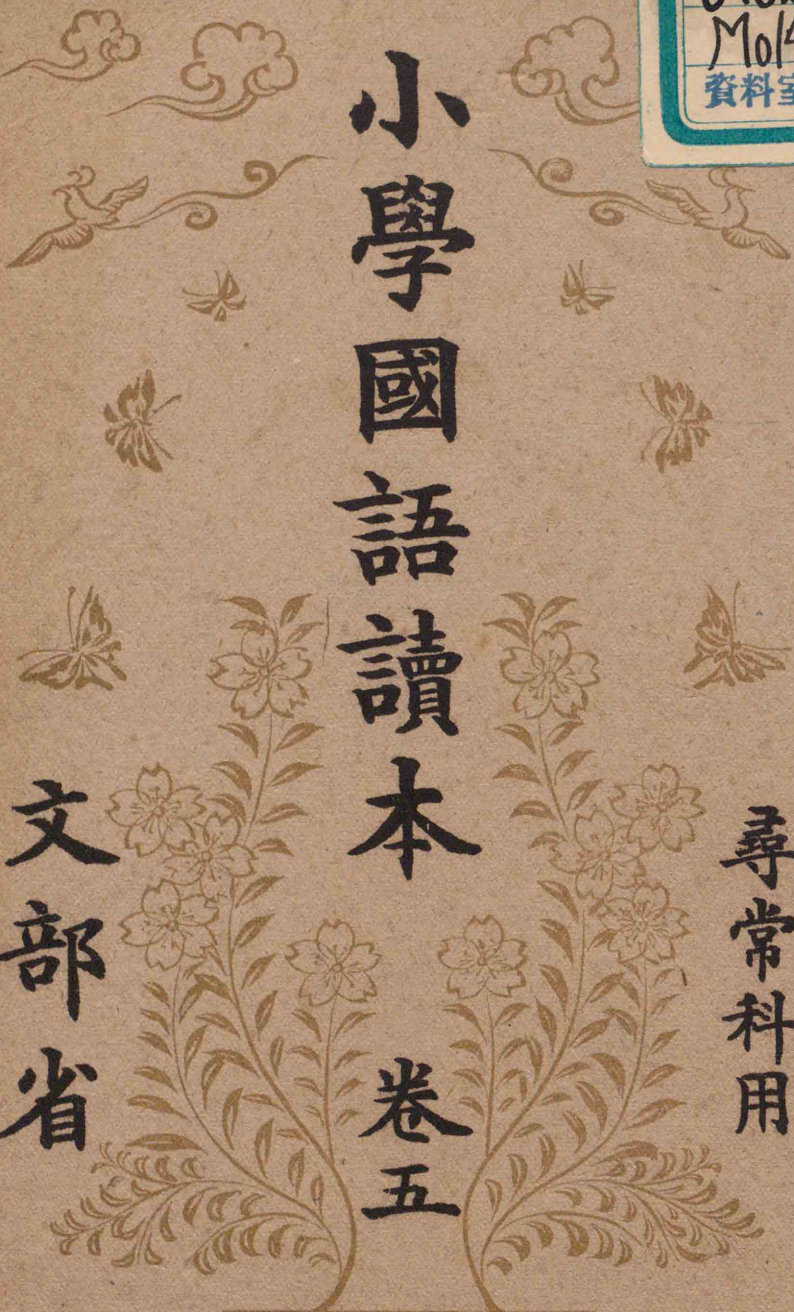
375.9
Mo/4
資料室

小學國語讀本

尋常科用

卷五

文部省



資料室

375.9
ML014



小學國語讀本

卷五

尋常科用

文部省

廣島大學
圖書印



もくろく

一	天の岩屋	一	舟の上とたゝみの上	六十五
二	參宮だより	六	水の旅	六十八
三	おたまじやくし	十一	大川	七十四
四	天長節	十七	クモノス	七十六
五	八岐のをろち	十九	夏の午後	八十
六	鯉ノボリ	二十五	日記	八十五
七	遠足	二十六	こぼろぎ	九十二
八	青葉	三十四	天孫	九十四
九	動物園	三十六	犬のてがら	百一
十	逃げたらくだ	四十二	電車	百四
十一	蠶	五十三	水引草	百十
十二	田植	五十六	二つの玉	百十二
十三	少彦名のみこと	五十七		

章國五

屋

暗明

一 天の岩屋

あまてらすおほみかみ
天照大神が、天の岩屋へおはいりになつて、岩戸をおしめになりました。明かるかつた世界が、急にまつ暗になりました。すると、今までかくれてゐた、いろくのわるものが出て来て、らんぱうをしたり、いたづらをしたりしました。

大ぜいの神様が、お集りになつて、

一 天の岩屋

一

鏡或 考

「どうしたら、よからうか。」
 と、ごさうだんなさいました。
 思ひかねの神といふ、大そうちゑのある神様
 のお考で、神様方のなさることがきまりました。
 或神様は、大きい、りつぱな鏡をお作りになり
 ました。或神様は、きれいな玉をたくさん作
 つて、くびかざりのやうに、ひもにお通しにな
 りました。また、或神様は、山へ行つて、大きな

幸國五

根 鳴 葉 底

榊さかきの木を根こぎにして、持つていらつしやい
 ました。
 この榊の木に、鏡と玉をかぎつて、岩屋の前に
 立て、また、たくさんのは、とりを集めて、岩屋
 の前でお鳴かせになりました。
 この時、天あめのうずめのみことは、岩屋の前へ進
 んで、舞まひをなさいました。かづらをたすきに
 かけ、さゝの葉を手を持つて、ふせたをけをだ
 いにして、その底をとんくふみ鳴らしなが

ら、こつけいな手ぶりや身ぶりをして、おもしろくお舞ひになりました。

大ぜいの神様は、どつとお笑ひになりました。

あまりおもしろさうなので、天照大神は、少しばかり岩戸をあけて、おのぞきになりました。

すると、神様方は、神の木を、ずつと前へお出しになりました。

おほみかみ大神のおすがたが、鏡



にうつりました。大神は、いよくふしぎにお思ひになつて、少し戸の外へ出ようとなさいました。

岩戸のそばで待つていらつしやつた^{あめのた}天手^{ぢからを}カ男のみことは、この時とばかり、さつと岩

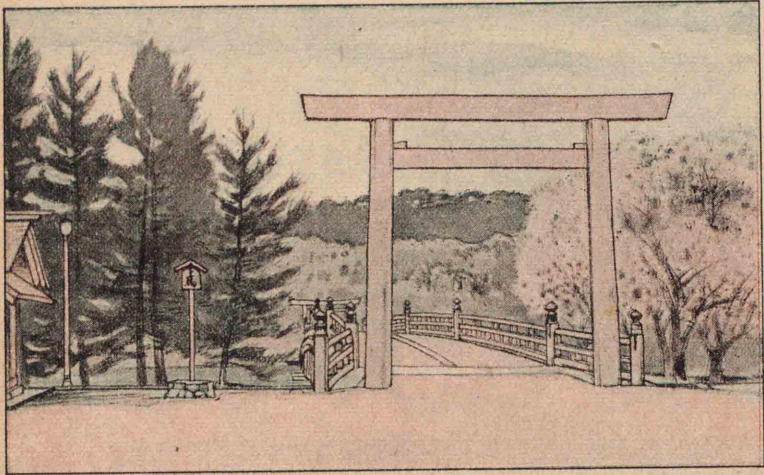
中

戸をあけて、大神のお手を取つて、外へお連出し申しました。
世界中が、もとのやうに明かなくなりました。
大ぜいの神様は、手をうつてお喜びになりました。

二 参宮だより

きのふ、午後、こちらへついで、外宮へ
おまゐりし、けふは内宮へおまゐり

感



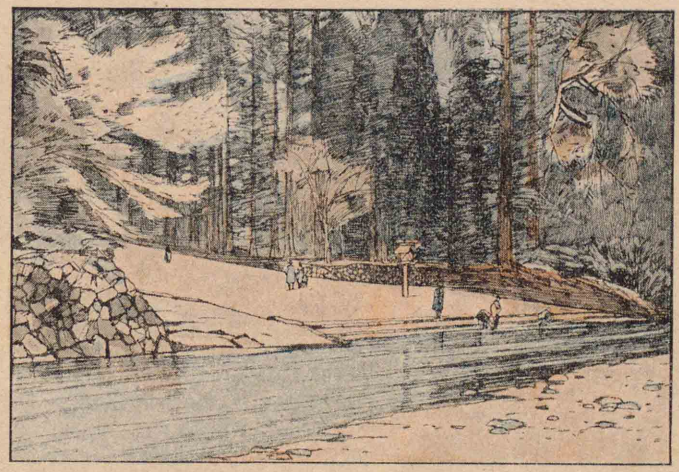
しました。

宇治橋を渡つて、
神苑に入り、しば
らく行くと、千年
もたつたかと思
はれる大木が立
ち並んでゐて、何
ともいへない、あ
りがたい感じが

御 同

しました。

五十鈴川のきれいな水で手を洗ひ、口をすすいで、御門の前に進んでをがみました。神殿は、外宮と同じやうに、お屋根をかやでふき、むねにかつを木を並



寺園五

切 下

べ、兩はしに千木がつけてあります。一切白木づくりで、金の金具が、きらきらとしてみますが、その外には、何のかざりもありません。まことに神々しくて、しぜんとあたまが下りました。

おまゐりをすましてから、方々を見物して、二見に來ました。今夜は、こゝでとまります。あすは、

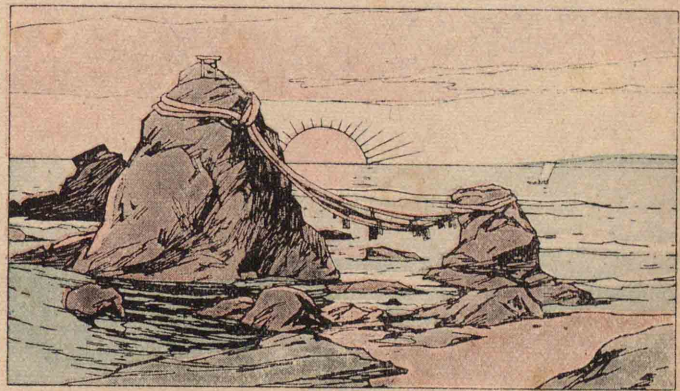
都京

父 出

朝早くおきて日の
出ををがみ、それか
ら京都へ立ちます。
おみやげに貝ざい
くを買ったから、た
のしみにして待っ
てお出でなさい。

四月十日

さち子どの



父より

兄弟

泳

尾頭

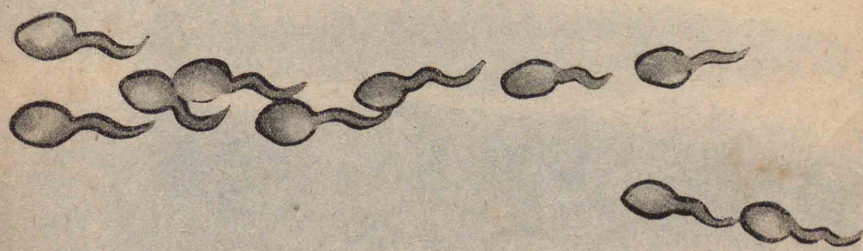
三 おたまじやくし

おたまじやくしは、毎日、大ぜいの兄弟や仲間
と一しよに、池の中を泳いでみました。まる
で、ありの行列ぎやうれつのやうに、後から後から、ぞろぞ
ろとつづいて行きました。どれも、これも、丸
い頭をふり、長い尾をふつて、元氣よく泳いで
みました。

おたまじやくしは、手も足もなくて泳げるの

三 おたまじやくし

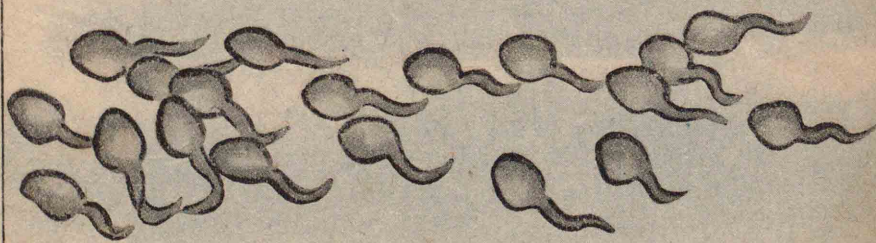
ですから、自分の親が、あの四本足の蛙だらうなどとは、ゆめにも思つてみませんでした。それよりも、時々池の中で見かける鯉こいやふなが、親ではないかと考へたことがあります。また、小さい目高を見ると、これも自分たちの仲間ではないかと思つたこともありました。



萬(万)

過

しかし、おたまじやくしには、何千何萬といふ、たくさんさんの兄弟や仲間があるので、すから、親がそばにゐてくれなくても、ちつともさびしくはありませんでした。また、目高やどぢやうなどど一しよに、あそぶ必要ひつえうもありませんでした。春の日は、だんくく過ぎて行き

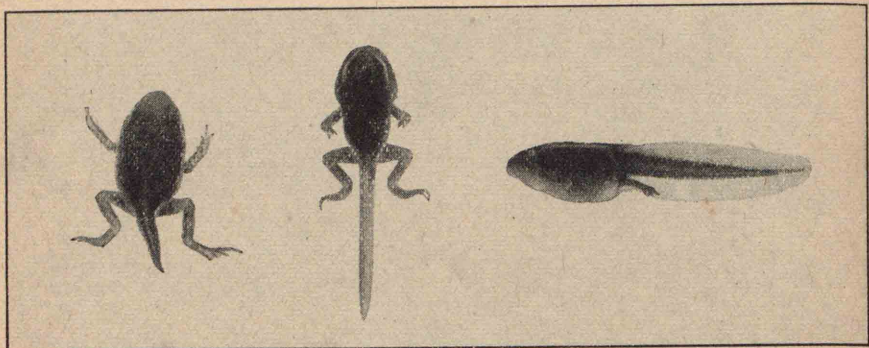


ました。水草が青々とのび、水の上には、時々
とんぼがとんで来て、かげをうつすこともあ
りました。

このころになると、おたまじやくしは、尾のつ
け根の所が、少しふくれて来ました。最初は、
それと氣もつかぬほどでしたが、後には、だん
だんふくれ出して、とうく、それが二本のか
はいらしい足になりました。

おたまじやくしは、何だかおそろしいやうな、

破胸



うれしいやうな氣になつて、わ
いわいさわいでみました。さ
うして、をりく、水の上にかほ
を出してみたりしました。
それから、また何日かたちまし
た。今度は、胸の兩わきが破れ
て、そこからも二本の足が出ま
した。
四本足になつたおたまじやく

短

息

岸

しは、尾がだんく短くなつて行きました。
 さうして、水の中にあるのが、いやになつて來
 ました。水の中にあると、何だか息がつまる
 やうな氣がしました。水の上にかほを出す
 と、氣がせいゝするやうに思ひました。
 或日、岸の草につかまつて、どうく池の外へ
 出て見ました。もう夏なつの始でした。草が青
 青としげつてみました。空には、お日様がぎ
 らぎら光つてみました。

後足をまげて、前足をついてすわつたかつか
 うは、これまでのおたまじやくしではありま
 せんでした。かうして陸へ上つた、たくさん
 の子蛙は、草のかげのあちらこちらを、うれし
 さうにとびまはりました。

四 天長節

ほがらかな天長節だ。
 春の日に光る若葉の、

しづかな森へ行くと、
小鳥のかはい、音楽。おんがく

「ばんぎい」と叫んでみたら、
「ばんぎい」と返すこたま。
鳥の歌、びつたり止んで、
しばらくは、しんとする。

小高い岡に上つて、



町

御 勇

見下す町の家々。

こゝにも、あすこにも、
日の丸の旗がひらく。

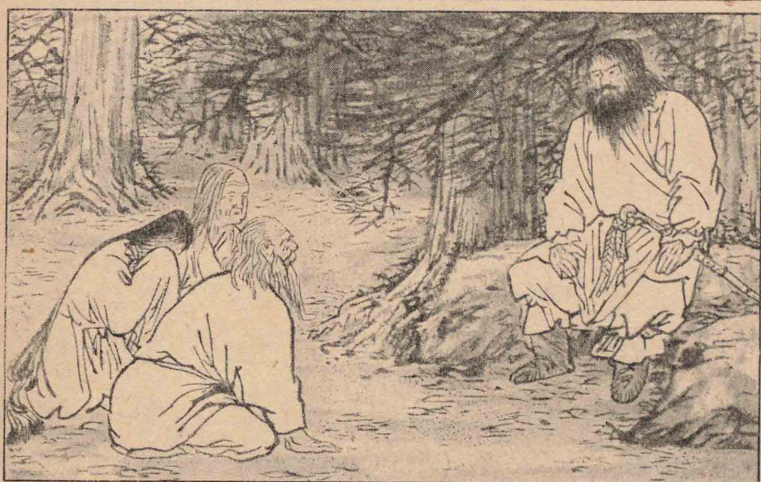
五 八岐やまたのをろち

あまてらすおほみかみ
天照大神の御弟に、すさのをのみことと申し
て、大そう勇氣のある神様がいらつしやいま
した。

或時、出雲いづもの國の、ひの川の岸をお通りになる

上

と、川上から箸はしが流れて來ました。みことは、



置

奥

この川上に人が住んでゐるなどお思ひになつて、川について、だんく山奥へおはいりになりました。すると、おぢいさんとおばあさんが、一人の娘を中に置いて、泣いてゐました。
「なぜ泣くのか。」

食

と、みことがお尋ねになると、おぢいさんが、

「私どもには、もと娘が八人ございましたが、八岐のをろちといふ大蛇だいじゃに、毎年一人づつ食はれて、もうこの子一人になりました。今年も、ちやうどその大蛇が出て來る時分になりましたので、泣いてゐるのでございます。」

と申しました。

「たい、どんな大蛇か。」

「長さは、八つの山、八つの谷にわたるほどで、頭が八つ、尾が八つ、目はまつかで、背中にはこけが生えてゐます。」

みことは、この話をお聞きになつて、

桶 意

「よし。その大蛇をたいぢてやらう。強い酒をたくさんつくれ。さうして、八つの桶に入れて、大蛇の来る所に並べて置け。」

とおいひつけになりました。

その通りに用意して待つてゐると、間もなく

飲

大蛇が出て来ました。酒を見つけて、八つの頭を八つの桶に入れて、がぶくど飲みました。

そのうちに、よひがまはつて、どうく眠つてしまひました。



血 劔

みことは、劔を抜いて、大蛇をずたくにお切りになりました。赤い血が、たきのやうに流れました。ひの川の水が、まつかになりました。

刃

尾をお切りになつた時、かちつと音がして、劔の刃がかけました。ふしぎにお思ひになつて、尾をさいてごらんになると、大そうりつばな劔が出て來ました。「これは、たふとい劔だ」と、みことはお思ひになつて、天照大神へたて

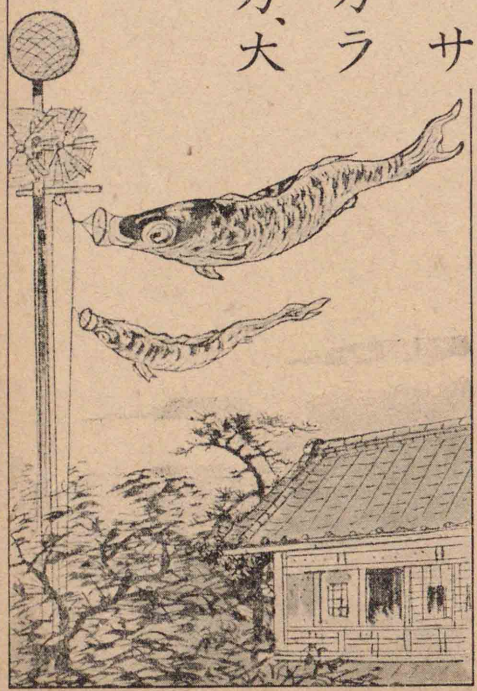
鯉

六 鯉ノボリ

まつられました。

照

ユフベノ雨ガハレテ、青葉ノ上ニ、日ガ氣持ヨク照ツテキマス。サヲノ先ノ矢車ガ、ガラガラト鳴ルト、鯉ガ、大キナロデ思フゾンブン風ヲノン



度 遠足 午前 役場 頭

デ、家ノムネヨリモ高く尾ヲ上げマス。ソノ尾ヲ下シテ來テ、サヲニツケルカト思フト、マタ腹ヲフクラマセテ、ヲドリ上リマス。ソノ度ニ、鯉ノカゲガ、地ノ上ヲ泳ギマス。

七 遠足

午前八時、私たちは學校の門を出ました。

役場の前から横道へはいりますと、材木さいもくをたくさんつんだ荷馬車にばしゃが來ました。先頭の先

馬



生が、

「よけるのですよ。」

とおつしやつたので、みんな、道ばたの石がき

にくつついてよ

けました。馬を

引いた人は、

「ありがたう。」

といつて通りま

した。

やがて山道になりました。一列になつて、細い道を上つて行きますと、しげつた杉の林へはいりました。坂が急で、道がじめくしてあまりましたので、松村君がすべつてころびました。先生が、

「みんな氣をつけなさい。」

とおつしやいました。

杉の林を抜けると、あたりがぱつと明かしくなりました。みんな息を切らして、はあく

いつてあました。

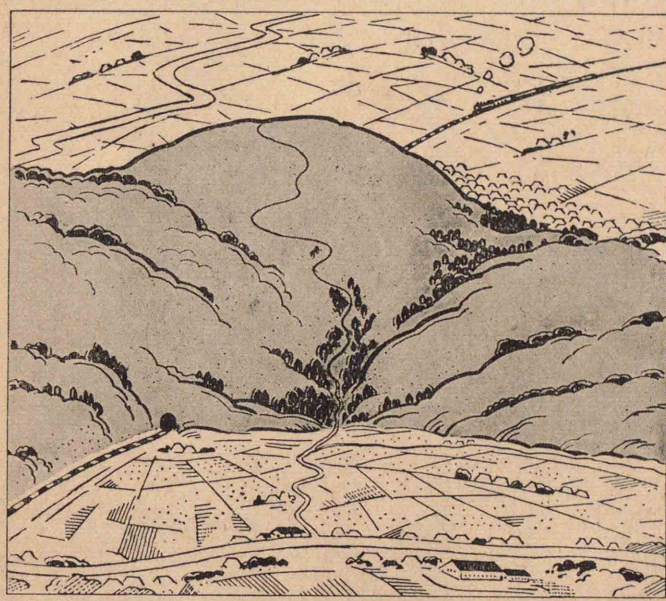
少し平かな、ひろい所へ來ました。私たちは、そこで休むことになりました。草の上に腰を下したり、ねころんだりして休みました。

「學校が見える、學校が見える。」

と、だれかがいひました。その方へ行つて見ますと、木の間から、私たちの學校や役場が、小さく見えました。

「さあ、出かけませう。もう一息で頂上ちやうじやうです。」

と、先生がおつしやいました。 私たちは、元氣を出して、また上り始めました。



とうく頂上へ着きました。向かふを見渡すと、ひろくとたんぼがつづいて、あちこちに、家や森が見えました。所々白く光つてゐる川も見えま

した。遠くの方には、山がうねくとつづいてみました。

「まだ少し早いがおべんたうにしませう。」と、先生がおつしやいました。みんな喜んでたべ始めました。

「あ、汽車だ、汽車だ。」と、山下君がいひました。見ると、向かふから、汽車が白い煙をはいて、こちらへやつて來ます。先生が、

社神

「あの汽車はこの山の下のトンネルを通ります。私たちもかへりには汽車に乗つて、この山の下を通るのです。」
とおつしやつたので、みんな手をうつて喜びました。
下りる時は、ほんたうにらくでした。先生が、「ゆつくり、ゆつくり。」とおつしやつても、しぜんと走るやうになりました。
山を下りると、そこに神社がありました。ハ

古 物見

幡まん様ださうです。古い、大きな杉が、たくさんありました。石のとりゐをくゞつて、拜はいてん殿の前に並んでをがみました。
それから、原口町のにぎやかな通を見物しながら、停てい、しやちやう車場へ行きました。
間もなく汽車が来ました。みんなが乗つたかと思ふと、汽車はもう動き出しました。さうして、すぐトンネルへはいりました。急に暗くなつたので、みんながおもしろがつて、わ

後

あつとさわぎ出しました。しかし、すぐまた
トンネルの外へ出ました。
せつかく乗つたと思つたら、もう、私たちの村
の停車場へ着きました。
午後二時半、学校へかへりました。

八 青葉

散

雨が止む、
雲が散る。



残

雲のあとに、うねくと、
青葉若葉の山々が、
遠く、近く残る。

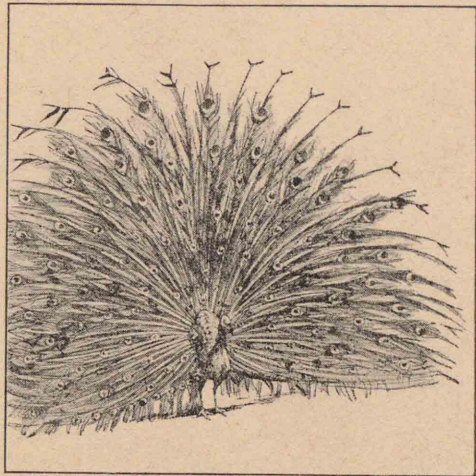
風が吹く、
木がゆれる。
木々のかげは、ゆらくと、
水のおもてに、地の上に、
青く、黒くうつる。



園

九 動物園

扇 居



「まあ、きれいだこと。
 い、美しい尾を、扇のやうにひろげました。
 へ行きました。
 門をはいつて少し行くと、
 くじやくが居ました。し
 ばらく見て居るうちに、長

心

と、ねえさんが感心して、いひました。
 次に見たのは、猿さるでした。大きい猿や、小さい
 猿が、きやつ、き
 やつ。どいひな
 がら、さわいで
 居ました。ぶ
 らんこをして
 居るのもあり
 ました、金あみ



鼻蛇 閉 卷

をつたつて、追っかけつこをして居るのもありました。

一番おもしろいと思つたのは、象ゾウでした。そのぶら／＼した長い鼻は、よく見ると、先が蛇の口のやうで、開いたり、閉ぢたりします。象は、たえず鼻を動かして、何かたべる物でも落ちて居ると、すぐその先ではさみ上げます。さうして、鼻をぐるつと巻くやうにして、口の所へ持つて行つてたべます。

耳も大きいものです。時々、ふは／＼とそれを動かしますと、ちやうど、大きなうちねはでふぐやうです。

大きなからだのわりに、目は小さくて、あれでも、下に落ちて居る物が、よく見えるのだらうかと思はれます。私は、始め、鼻の先に目がついて居て、物をさがすのではないかと思つたほどでした。

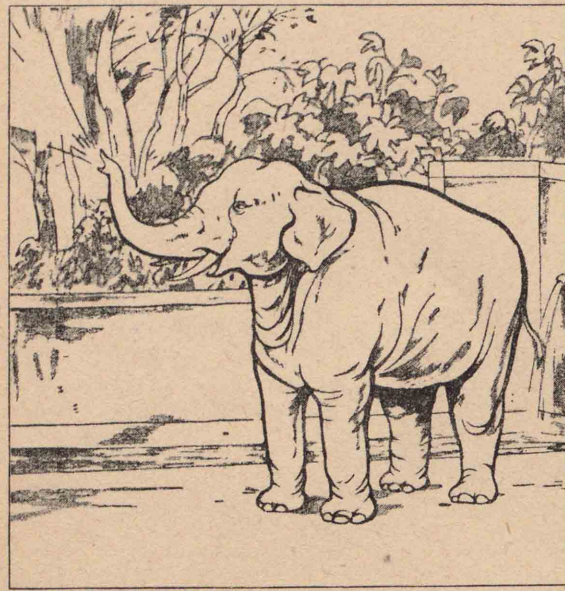
象のかこひの中には、向がふの方に、池のやう

投 浮

なものがこしらへてありました。だれかが、その中へせんべいを一枚投入れますと、象はのこくと歩いて行つて、長い鼻をのばして、浮いて居るせんべいを拾ひ上げました。それから、象は、ざぶくと水の中へはいつて行きました。水は深くて、大きなからだ、半分くらゐはかくれました。すると、水がさつとあふれて、外へ流れ出ました。

「まるで、島のやうだね。」

管 水



九動物園

と、だれかがいひました。象は、しばらくして、またのこくと上つて来ました。さうして、今度は、水を鼻へ吸ひこんで、その水で、自分のからだを洗ひました。ちやうど、ポンプの管で水をかけるやうでした。しまひには、吸ひこんだ水を、ふん水

のやうに吹上げました。

「や、かけられたら大へんだ。」

といつて、見物人は逃出しました。私も、ねえさんと一しよに、そこを立つて、らくだの居る方へ行きました。

十 逃げたらくだ

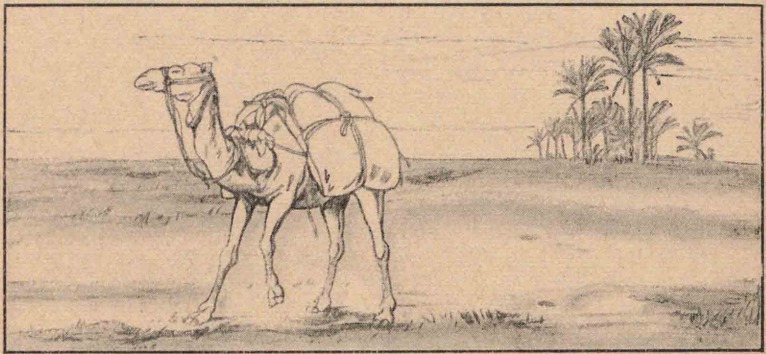
(一)

商旅

さばくの中で、或旅人が、二人の商人に出あつ

子様

片



た。

旅人「あなた方は、大そう心配らしい御様子ですが、もしや、らくだを逃したのではありませんか。」

二人「さうです、さうです。」

旅人「そのらくだは、片目ではありませんか。右の目がつぶれて居ませう。」

存

二人「よく御存じですね。まつたくその通りです。」

旅人「さうして、左の足が一本短くて、前齒まへばが二三本抜けて居ませう。」

二人「それにちがひありません。どこでござらんになりましたか。」

旅人「さうして、つけて居た荷物は、麥あわでせう。」

二人「たしかにさうです。どこに居るか、どうぞ、早くをしへて下さい。」

荷物

甲

旅人「いや、私はそのらくだを見たのではありません。」

甲の商人、

「え、でも、そんなにくはしく御存じではありませんか。」

乙の商人、

「それとも、だれかにお聞きになつたのですか。」

旅人「いゝ、え、見たのでも、聞いたのでもありません。」

せん。

二人は、かほを見合はせて、

甲「をかしいね。こいつがどろぼうだぞ。」

乙「さうだ、さうだ。さあ、役所へ引つぱつて行
け。」

二人は、むりに旅人を役所へ引つぱつて行つ
た。

(二)

役人は、三人を呼出して、

役人「一たい、どういふことか、くはしく申せ。」

甲「この男が、私どものらくだをぬすんだので
ございます。私どもは、麥をつけたらくだ
を引いて、さばくの中を通つて居ましたが、
とちゆうで一休して居るうちに、つい眠つ
てしまひました。」

乙「目がさめて見ると、らくだが居ませんので、
おどろいて方々さがして歩きました。そ
のとちゆうで、この男に出あひますと、向か



ふから「らくだを逃した
 のではないか。」と尋ねる
 のでございませす。
 甲「さうして、そのらくだは、
 片目だらうのびつこだ
 らうの、齒が抜けて居る
 だらうのと、一々見たや
 うに申すのでございま
 す。

品

乙「その上、つけて居た荷物の品までいひあて
 ました。」

二人「らくだをぬすんだのは、どうしても、この
 男にちがひありません。」

役人「こりや、旅人、その方にも、いひ分があるな
 らば申せ。」

旅人「私をぬす人などとは、とんでもないこと
 でございます。私がさばくを歩いて居ま
 すと、らくだの足あとがつゞいて居るのに、

人の足あとが見えませんが逃げたのではないかと思つたのでございます。

役人「そのらくだが片目だといふことは、どうしてわかつたか。」

旅人「道の片がはの草ばかりが、食つてあつたからでございます。」

役人「それでは、びつこといふことは、どうして知つて居るか。」

淺

旅人「片方の足あとが、一つ置きに淺くなつて居るのでわかりました。」

役人「齒の抜けて居るといふことは、どうしてわかつたか。」

旅人「草を食取つたあとを見ますと、かみ切れないで残つて居る葉があるので、さう考へました。」

役人「なるほど、聞いて見れば、一々もつともである。」

二人「もしく、お役人様、それなら、荷物の品を
 どうして知つて居るのでございませうか。
 旅人「それは何でもありません。道に、麥がこ
 ぼれて居たからです。
 役人「よし、よくわかつた。たしかに、お前
 がぬすんだのではない。もう、かへつてよ
 ろしい。二人がうたがつたのも、むりでは
 ないが、今聞いた通りである。早く行つて、
 らくだをさがすがよい。」

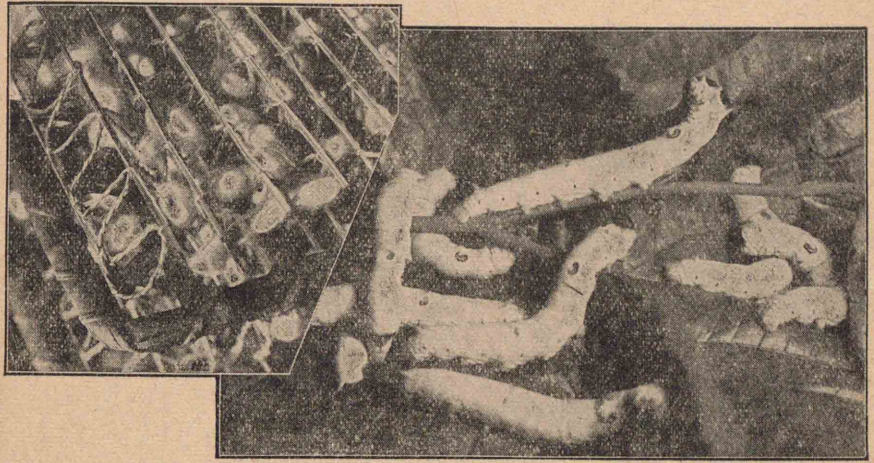
蠶(蚕)

十一 蠶

キノフカラ、ウチノ蠶ガ上リ始メマシタ。上
 ル頃ニハ、蠶ノカラダガ、スキ通ルヤウニナリ
 マス。モウ桑ノ葉ヲタベナイデ、頭ヲ上げテ、
 繭ヲカケル所ヲサガシマス。ソレヲ拾ツテ、
 マブシヘ移スノデスガ、少シデモオクレルト、
 カゴノマハリヤ棚ノスミナドデ、繭ヲカケ始
 メマスカラ、チツトモユダンガ出来マセン。

棚 桑 頃

又



ケフノ才晝頃ハ、ウチ中、目
 ガマハルホド、イソガシウ
 ゴザイマシタ。
 マブシノ中デハ、カサ〜
 トイフ音ガシテ居マスガ、
 コレハ、蠶ガ動クカラデス。
 早イノハ、モウ繭ヲ作り上
 ゲテ居マス。又、作りカケ
 ノウスイ繭ノ中デ、キユウ

クツサウニ、カラダヲマゲテ、一生ケンメイニ
 ハタライテ居ルノモアリマス。マダ、繭ヲカ
 ケル場所ヲサガシテ居ルノモアリマス。今
 桑ヲタベテ居ル蠶モ、アシタノ朝マデニハ、大
 テイ上ツテシマフサウデス。
 サツキ、オカアサンガ、

「イヨ〜今夜一晚ニナツタ。」

ト、ネエサンニオツシヤイマシタ。オカアサ
 ンモ、ネエサンモ、コノ五六日ハ、夜モロク〜

オヤスミニナライナイノデス。

十二 田植

朝からたんぼのにぎはしき。
村中そり出で、田植だ、田植だ。
すげ笠^{がさ}あみ笠^{がさ}赤だすき、
笑ひ聲やら、歌の聲。
晩までたんぼのにぎはしき。

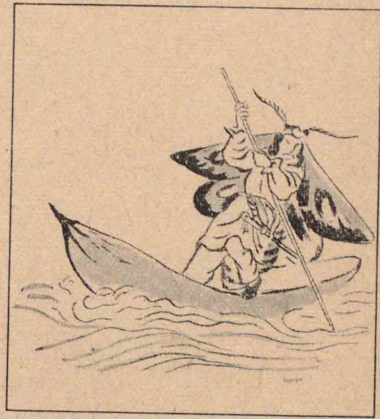
となり近所や、しんるゐ仲間、
手つだひしあつて、植ゑるはしから、
早も、つばめのちう返り。



十三 少彦名^{すくなひこな}のみこと

大國主のみことが、出雲^{いづも}の海岸を歩いていら

者供



つしやいますと、波の上に、何か小さい物が浮かんで、こつちへ近寄つて來ました。

「何だらう、あれは。」

と、みことは、お供の者におつしやいましたが、お供の者にもわかりませんでした。だんくく近寄つて來るのをよく見ると、豆のさやのやうな物を舟にして、それに何か乗つて居ました。

蟲(虫)

皮

「豆のさやに、蟲が乗つて居ます。」

と、お供の者が申しました。

しかし、蟲ではありませんでした。蟲の皮を

着物にして着て居る、小さい神様でした。み

ことは、

「小さい神様だなあ。一たい、何といふお方

だらう。」

とおつしやいますと、お供の者は、

「こんな小さい神様を、私は、見たことも、聞い

たこともありません。」

と申しました。

「あなたはどなたですか。」

と、みことは、その神様にお尋ねになりましたが、返事をなさいません。

その時、ひよつこり出て来たのは、ひきがへるでした。みことは、

「お、ひきがへる、よい所へ来た。お前は、方方へ出歩いて、何でもよく知つて居るが、こ

の小さいお方の名を知らないか。」

ひきがへるは、目をぱちくりさせながら、

「いや、存じません。きつと、あの物知りのかかしが知つて居るでせう。」

と申しました。

か、しは、田の中に立つて四方を見て居るの
で、何でもよく知つて居ました。大國主のみ
ことは、か、しに向かつて、

「おうい、お前は、この小さいお方を知つて居

るか。

すると、かゝしは、

「それは、少彦名のみ

ことといふ神様で

す。からだは小さ

いが、大そうちゑ

のあるお方です。

と答へました。

大國主のみことは、大そ



寺國五

病

うお喜びになつて、少彦名のみことを、おうちへお連れになりました。

二人は、兄弟のやうに仲よくなさいました。心を合はせて、野や山を開いて田や畠にしたり、道をつけたり、川に橋をかけたたりなさいました。人間や家畜かちくの病氣かちくも、おなほしになりました。

或日、少彦名のみことは、おつしやいました。

「私は、いつまでも、こゝに居るわけには行き

ません。これで、おいと
まいたします。
大國主のみことは、おどろ
いて、

「どうして。どこへお出でになるのですか。」

「遠い所へ行きます。」

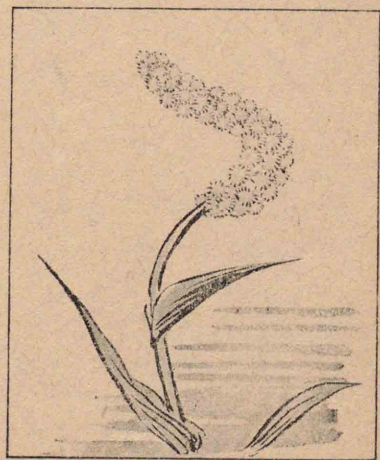
「何しに行くのです。」

「新しい國を開きに。」

かういひながら、少彦名のみ



新



粟

姿

ことは、粟の莖につかまつて、するく〜とお上
りになりました。すると、一度しなつた粟の
莖が、はね返るひやうしに、小さい神様のおか
らだは、ぼんと空へとび上りました。

「さやうなら。」

と、一聲おつしやつたま、少彦名のみことは、
もう、お姿が見えなくなつてしまひました。

十四 舟の上とた、みの上

荒 夫 客

或人が始めて舟に乗つた時、海が荒れたので、大そう弱つて居ました。そこへ、一人の水夫がおもしろさうに、歌を歌ひながら來ました。その客は、水夫に向かつて、

「こんなに海が荒れるのに、あなた方はよく平氣で居られますね。」

といふと、水夫は、

「平氣ですとも、舟は私どもの家ですもの。舟で暮すほど、おもしろいことはありません。」

皆 代

ん。ぢ、いも、父も、皆、舟の上で死んだのです。といひました。

「そんなに代々舟の上で死んでも、舟がこはくはないのですか。」

と、客がふしぎがると、水夫は、

「あなたのおとうさんは、どこでおなくなりになりましたか。」

と尋ねました。

「父も、ちゝいも、たゝみの上で死にました。水夫は、

「それでは、あなたも、たゝみの上がこはいでせう。」

といつて、笑ひました。

十五 水の旅

私は、もと雨の一しづくで、空から落ちて来たのです。山の木の葉の上に休んで居ました

が、風にゆり落されて、大ぜいの友だちと一しよに、谷川の中へはいりました。

谷川を下りながら、みんなは、うれしさに歌つたり、さわいだりしました。そのうちに、高

いがけの上に来ました。一思ひにとび下りましたが、目がくらんで、しばらくは何



重

眺

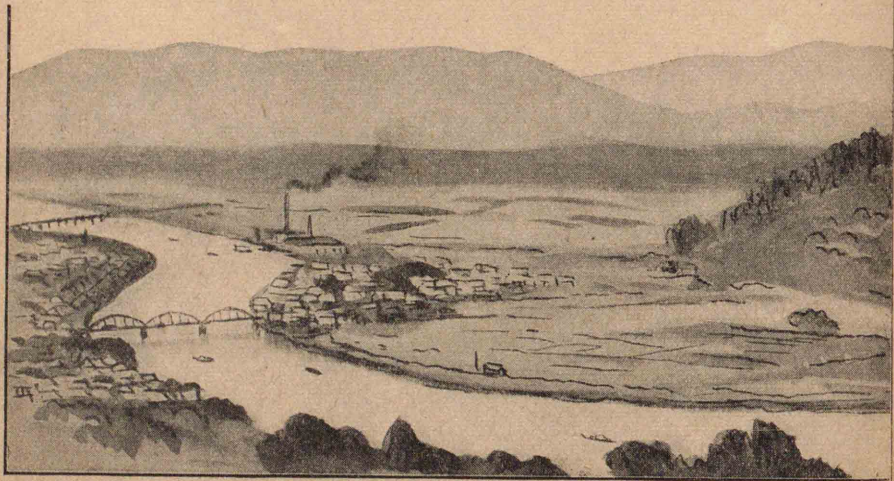
廣

もわかりませんでした。
 みんなが重なり合つて落
 ちる音、さわぐ聲に、ふと氣
 がついて、あたりを見まは
 しますと、二三人の人が居
 て、「みごとな瀧だ」といつて、
 眺めて居ました。
 谷を出ると、あたりが少し
 廣くなつて來ました。あ

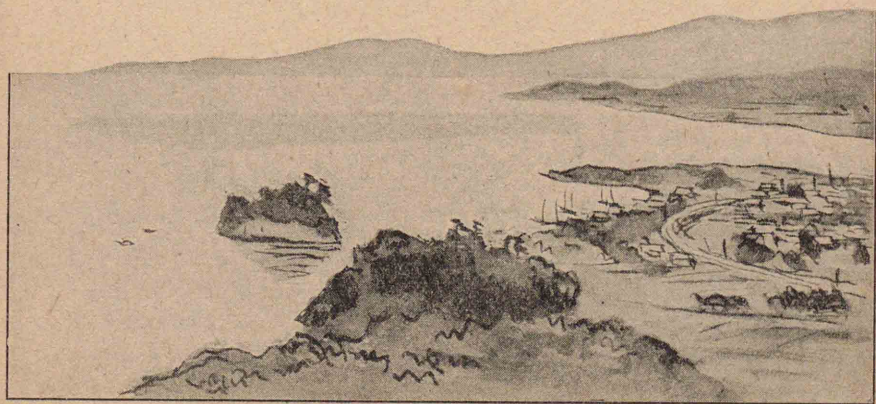


静 續

ちこちに、村の家が見えま
 した。右からも、左からも、
 おひく仲間が集つて來
 て、いよくにぎやかにな
 りました。
 廣いく野原に出ました。
 美しい畠や、田や、静かな村
 が續いて居ました。その
 間を、私たちは、晝は暖な日



に照らされ、夜はきれいな
 月を浮かべながら、ゆつく
 り歩きました。そばを通
 る人は、きれいな川だ。とい
 つて、ほめてくれました。
 とつぜん、上の方でさわが
 しい音がしました。見上
 げると、大きい橋があつて、
 人や、車や、馬が通つて居ま



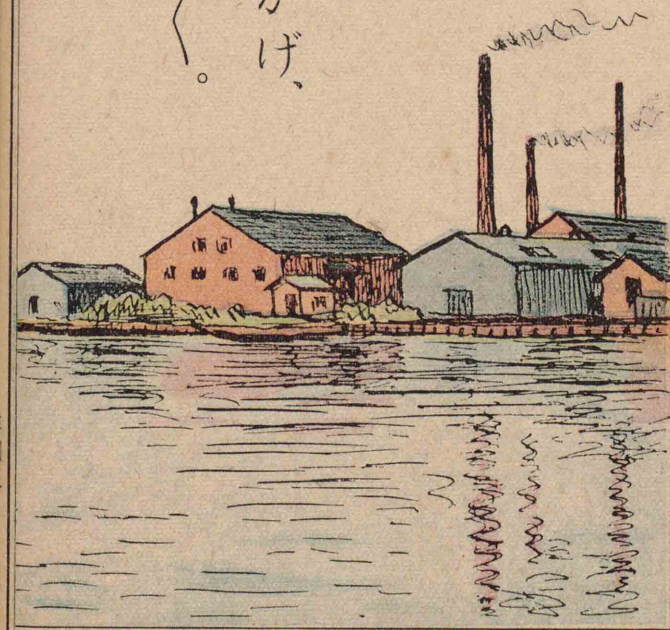
積

した。間もなく、町の中へはいりました。兩
 がはには、たくさんの家が並んで居ました。
 高いえんとつも見えました。
 ふと、大きな重い物が、私たちの上に來ました。
 荷物を積んだ舟が通つたのでした。それか
 らも、いろくくの舟が通りました。かうして
 居る間に、私たちは、とうく海へ出ました。
 海は、はてもないほど廣くて、どちらを見ても、
 私たちの仲間ばかりでした。私たちは、手に

手を取つて、歌つたり、をどつたりして喜びました。

十六 大川

大川の水の上、
川ばたの工場の
えんとつの長いかけ、
ゆらく、ゆらく。



工場

橋

川舟が静かに通る。
舟のかけ、人のかけ、
人の持つさをのかけ、
ゆらく、ゆらく。
ごうくと音たてて、
汽車が行く鐵橋の
かけも、また水の上、
ゆらく、ゆらく。



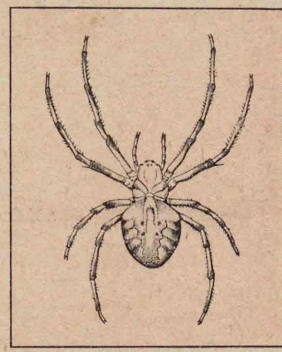
匹 階

絲(糸)

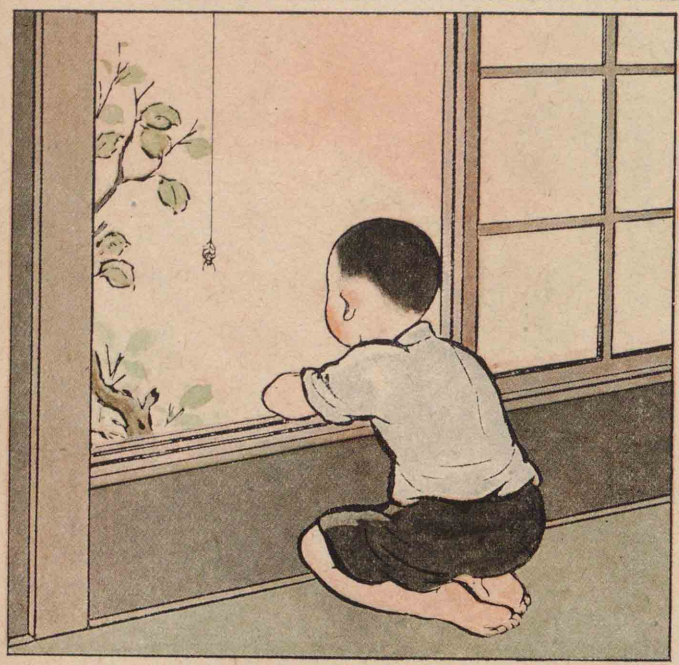
十七 クモノス

二階ノマドカラ眺メテ居ルト、大キナ鬼グモ
ガ一匹、スウツト、私ノ目ノ前ニブラ下ツテ來
マシタ。私ハ、ビツクリシマシタ。

見ルト、グモハ、雨ドヒノ所カラ、
絲ヲ引イテ下リテ來タノデス。
サウシテ、ゾノマ、ジツトシテ、
動カウトモシマセン。コレカラ、一タイ、何ヲ



米 糲



シヨウトスルノカト思フト、私ハ、急ニオモシ
ロクナツテ來マシタ。

クモハ、ヤガテ、後ノ
方ノ足ヲ動カシテ、
オシリノ所カラ、ダ
クサンノ細イ絲ヲ
引出シ始メマシタ。
絲ハ、一糲、二糲ト、見
ル間ニノビテ、二米

柿 傳

グラキニモナリマシタ。何十本トモ知レナイ、細イ、白イ絲ガ、夕風ニユラレナガラ、フハフハト空中ニタゞヨツテ居ルノハ、ホシタウニキレイデシタ。
ソノウチニ、コノタクサンノ絲ノ中ノ一本ガ、向カフノ柿ノ木ノ枝ニクツツキマシタ。クモニハ、ソレガ、スグワカルモノト見エテ、シキリニ、コノ絲ヲ引ツパツタリ、動カシタリシテ居マシタガ、ヤガテ、ソレヲ傳ハツテ向カフヘ

安

渡リ始メマシタ。サウシテ、風ニユラレナガラ、ヤツト柿ノ木ニタドリ着キマシタ。クモハ、ホツト一安心シタヤウデシタ。
今度ハ、前ノ方ノ足ヲシキリニ動カシテ、コノ絲ヲ自分ノ方ヘタグリ始メマシタ。スルト、今マデタルンデ居タ絲ガ、ダンくニ、マツスグニナリマシタ。カウシテ、雨ドヒト柿ノ木トノ間ニ、一スチノ絲ガ、空中ニピントハリ渡サレマシタ。

夏

クモハ、ゴノ上ヲ、イソガシサウニ行ツタリ來
 タリシテ、スヲ作ル仕事シゴトヲ續ケマシタ。
 私ハ、グモノチエノアルノニ、スツカリ感心シ
 テシマヒマシタ。
 晩ニナツテ又行ツテ見マスト、ゾコニハ、モウ、
 リツパナクモノアミガ出來テ居マシタ。

十八 夏の午後

「じいつど、せみが鳴き出した。」

桐僕

僕は、はだして庭へ出た。せみは、桐の木で鳴
 いて居る。そつと行つて見ると、二米ぐらゐ
 の高さの所に、あぶらせみが一匹止つて居る。
 背のびして、手をのばしてみたが、だめだ。僕

の手先よ
 りは、四十
 糰も高い。
 取れない
 と思ふと



井

くやしくなつて、木のみきをとんとたゝく。せみは、びつくりしたやうに、「じゝ」と聲をたてて、とんで行つた。

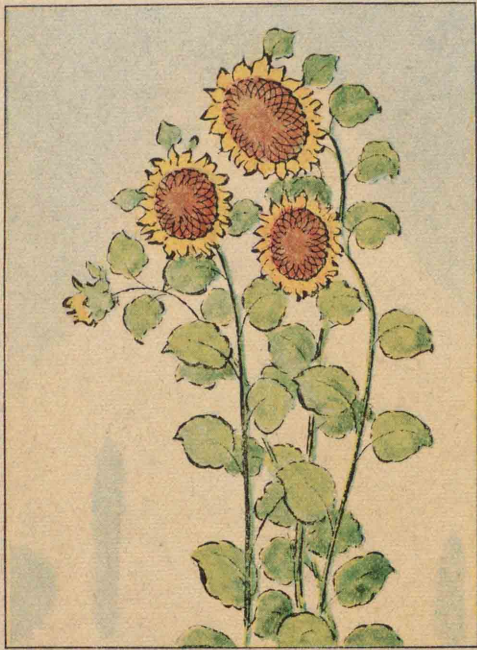
暑

井戸ばたへ行つて、足を洗つた。ぎあつと、つめたい水をかけると、いゝ氣持だ。下駄げたをはいて、うらの畠へ行つてみる。

なすも、きうりも、みんな暑さうにぐつたりして居る。きうりにそへて立ててある竹に、とんぼが止つたり、はなれたりして居る。せみ

益 蟲

の代りに、あれを取らうか。いや、とんぼは益蟲だから、取らない方がよいと、先生がおつし



やつた。

咲顔

畠のすみの日まはりには、暑い日を一ぱい受けて、夏はおれの世界だといふやうな顔をして、三つ咲いて居る。今では、僕よりもずつと背が高いが、これも僕が植ゑたの

誰

だと思ふと、何だかかはい、気がする。
暑い、暑い。うちへかへつて、えんがはに腰を
かけて居ると、川で、誰かあそんで居るらしい。
たのしさうな聲が聞えて来る。さうだ、僕も
行つてみよう。

「おかあさん、川へ行つてもようございます
か。」

と、大きな聲で聞いてみると、

「行つてもいゝが、あぶないから、よく氣をつ

けなさいよ。」

と、あちらの部屋へで、おかあさんの聲がした。
僕は、帽子をかぶつて、一もくさんに走つて行
つた。

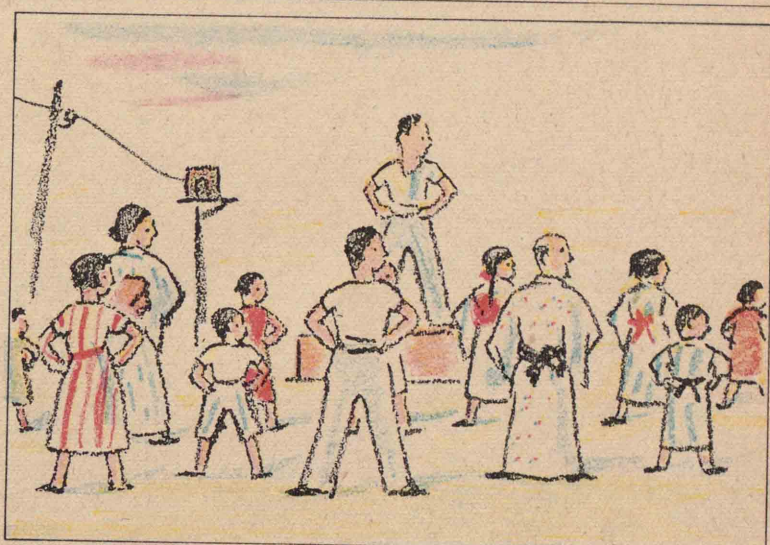
十九 日記

八月一日 水曜 晴

けふから夏休だ。ラヂオたいさう体操たいさうに行くので、朝
は五時半に起きた。まだ早いつもりで學校

起 晴曜日 記 帽

木 涼



八月二日

木曜 晴

へ行つたら、もう大ぜい
 来て居た。あしたから
 は、もつと早く来ようと
 思った。
 朝御飯あさごはんがすんでから、少
 し勉強をした。休中は、
 毎朝、涼しいうちに勉強
 するつもりだ。

砲

けさは、五時に起きて、ラヂオ体操に行つた。
 僕が三番目だつた。
 勉強がすんで
 から、草むしり
 のお手傳をし
 た。
 午後、中村君が
 来た。二人で、水鐵砲をこしらへてあそんだ。



八月三日

金曜 晴、夕立

東

東京のをばさんが、春子ちゃんを連れて、お出でになつた。おみやげに、おもしろい本をもらつた。

午後二時頃、ひどい夕立が降つて来た。おぎしきでねて居た春子ちゃんが、雷の音で目をさまして、わつと泣出した。

八月四日 土曜 晴、後くもり

一郎さんから、はがきが来た。

暑いことですね。皆さん、おかはりはあり

丈

ませんか。こちらは、皆、丈夫です。私には、いさんと、毎日、川へ泳ぎに行きます。この頃、少し泳げるやうになつて、うれしくてたまりません。どうか、をぢさんや、をばさんによるしく。

と書いてあつた。

このはがきを、おとうさんがごらんになつて、「一郎は、なかく、字がうまくなつた。お前も、負けないやうにしなければいけないね。」

とおつしやつた。
けふも午後、夕立が来さうになつたが、どうと
う降らなかつた。

八月五日 日曜 晴

一郎さんに返事を出した。

おはがきありがたう。皆さん、御丈夫ださ
うで、けつこうです。こちらにもみんな元氣
です。君は泳げるやうになつたさうです
ね。僕も、來年から泳を始めようと思つて

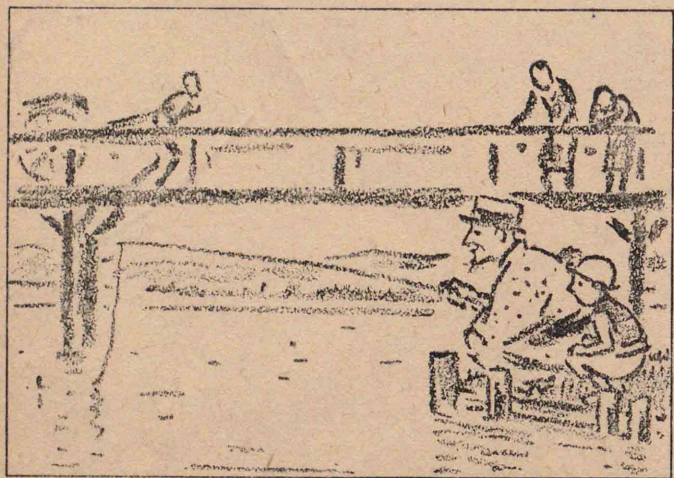
來

釣

居ます。をと、ひから、東京のをばさんが、
春子ちゃんを連れて、來て居ます。皆さん
によるしく。
夕方、ねえさんと二人で、庭
に水をまいた。

八月六日 月曜 晴

午後、おぢいさんが、さかな
釣りに行かれるので、僕も
ついて行つた。廣田川を



だんくどさかのぼつて、朝日橋のそばまで
行つた。ずめぶん、たくさん釣れた。かぞへ
て見たら、三十二匹あつた。

二十こほろぎ

かべのわれ目で、
こほろぎが、
ころ、ころ、ころ、ころ、
鳴いて居る。

静かな、静かな家の中、
ころ、ころ、ころ、ころ、びびく聲。
そつとあかりを
近寄せて、
のぞいて見れば、
長いひげ、
黒い頭と目が光る。
ちよろりと中にかくれこむ。

消 孫

まぶしかつたか、
 こほろぎよ。
 おどろいたのか、
 こほろぎよ。
 ふつと、あかりを消したれば、
 外は明かるい月のかげ。

二十一 天孫

治 汝 皇 御 位

切

天照大神あまてらすおほみかみは、天孫に、ぎのみことをお呼びになつて、

「日本の國は、わが子孫が治むべき國である。汝、行つて治めよ。天皇の御位は、天地の續くかぎり、いつまでもさかえるぞ。」
 とおつしやいました。さうして、御鏡に、御玉と御劔をおそへになつて、みことにお渡しになりながら、

「この鏡は、われと思つて大切にせよ。」

とおつしやいました。に、ぎのみことは、つ
つしんでお受けになりました。
大ぜいの神様が、お供をなさることになりま
した。いよくお立ちといふ時、先發せんぱつの者が、
急いでかへつて来て、

「下界へ行くときちゆうにおそろしい男が、道
をふさいで立つて居ます。背も高いが、鼻
がおそろしく高く、目は鏡のやうでござい
ます。おまけに、からだ中から光を出して、

九十五

事

天も、地も明かるいほどでございます。
と申しました。

天照大神は、この事をお聞きになつて、

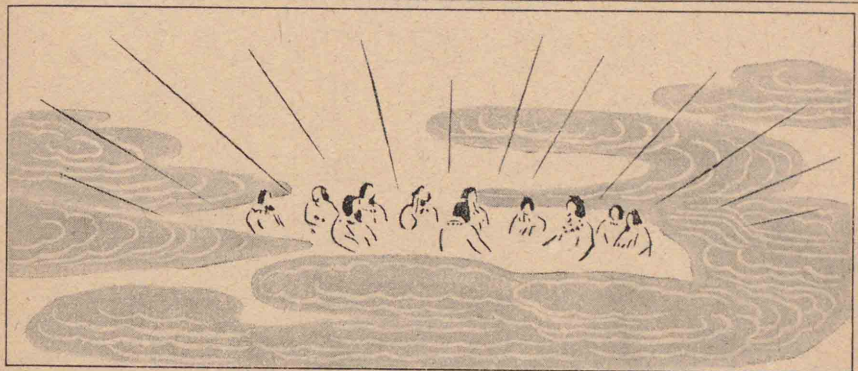
「それは何者であるか、尋ねてまわれ。天あめの

うずめ、お前行け。」

とおつしやいました。

天のうずめのみことは、しつかりした氣性きせいで、
しかも、へうきんなお方でした。行つてごら
んになると、なるほど、相手は、おそろしさうな

相



男です。うずめのみことは、わざと、こつけいな様子をして、お笑ひになりました。すると、そのおそろしい男がいひました。

「お前は誰だ。 どうして、そんなに笑ふのか。」

「おそれ多くも、天孫に、ぎのみことのお通りになる道をふさいで立つて居るあなた

問

承

こそ誰です。

と、うずめのみことはお問返しになりました。

相手は、急に様子をかへて、



「いや、私は、天孫がお出でになると承つて、こゝへおむかへに出て居るのです。 私が御案内あんないいたしま

す。私の名は、猿田彦と申します。といひました。

うずめのみことは、かへつてこの事を申し上げました。

に、ぎのみことは、天照大神においとまごひをなさつて、大空の雲をかきわけながら、勇ましくお降りになりました。猿田彦のみことが、先に立つて、御案内申し上げました。

天孫は、日向の高千穂の峯にお降りになりました。

峯 降

した。さうして、天照大神のおことば通りに、日本の國をお治めになりました。

二十二 犬のてがら

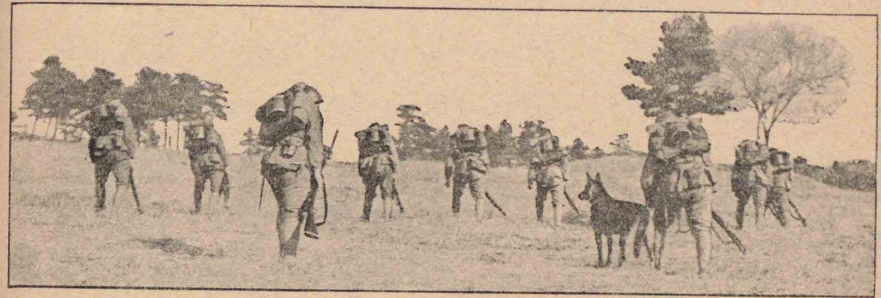
満洲事變の最初の夜の事でした。

我が軍にしたがつて、傳令の役をして居た軍犬金剛那智は、いよくとつげきとなると、我が軍のまつ先につき進んで、敵軍の中にとびこみ、死物ぐるひで、かみつきました。

犬 我

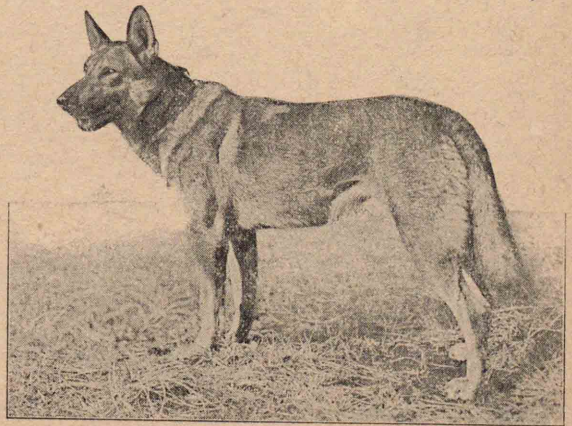


陣 戦



二十二 犬のてがら

はげしい戦の後、
敵は、とうく陣
地をすてて逃げ
ました。
をりから上る
朝日の光に、高



百二

くか、げた日の丸の旗は、勇まし
くか、やきました。萬歳ばんざいの聲は、
天地にとゞろきました。しかし、

百三

幾

あの金剛那智は、どこへ行つたのでせう、いく
ら呼んでも、かへつて来ませんでした。
犬のかゝりの兵士は、一生けんめいになつて
さがしました。
とうく見つけました。けれども、それは、を
り重なつて死んで居る敵の死がいの間でし
た。
二匹は、身に幾つものたまを受けて、血にまみ
れて死んで居ました。よく見ると、二匹とも、

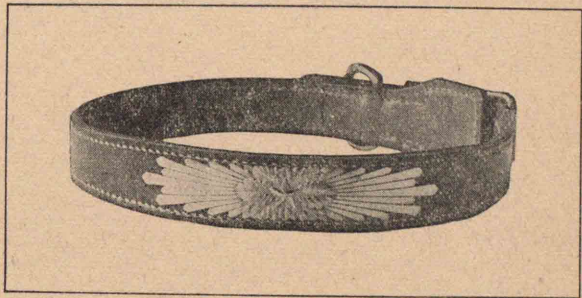
二十二 犬のてがら

百三

涙

賞

電



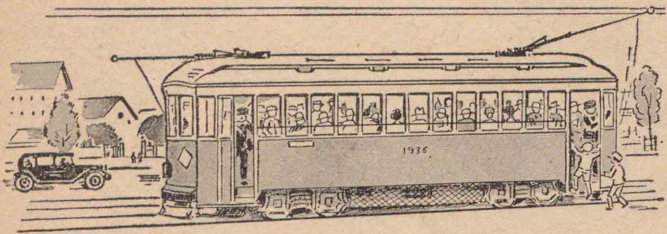
口には、敵兵の軍服の切れはしを、
しつかりとくはへて居ました。
これを見た兵士は、思はず涙ぐみ
ました。

軍犬の金鷄勳章きんしよくんしやうともいふべき甲
號功章がうこうしやうを、始めていたゞいたのは、
實にこの金剛那智でありました。

二十三 電車

席

言



ニイサント電車ニ乗リマシタ。

人ガ一パイ乗ツテ居テ、アイテ居ル席ハ、一ツ
モアリマセンデシタ。私ガ、ニ
イサント並ンデ立ツテ居マス
ト、スグ前ニカケテ居タヨソノ
ヲヂサンガ、私ノ顔ヲ見ナガラ、
「ボツチヤン、コ、ヘオカケナ
サイ。」
ト言ツテ、立ツテ下サイマシタ。

私ハ、少シアワテタヤウニ、

「イ、ノデス。僕、立ツテ居マスカラ。」

ト言ヒマシタガ、ヲヂサンハ、

「イヤ、ワタシハ、モウチキ下リルノダカラ、カマハズ、オカケナサイ。」

ト言ヒナガラ、アツチヘ行キカケマシタ。

「ドウモ、アリガタウ。」

ト、ニイサンガ言ヒマシタ。

「アリガタウ。」

表

ト、私モ言ヒマシタ。

「セツカク、アケテ下サツタノダ。オ前、オカケ。」

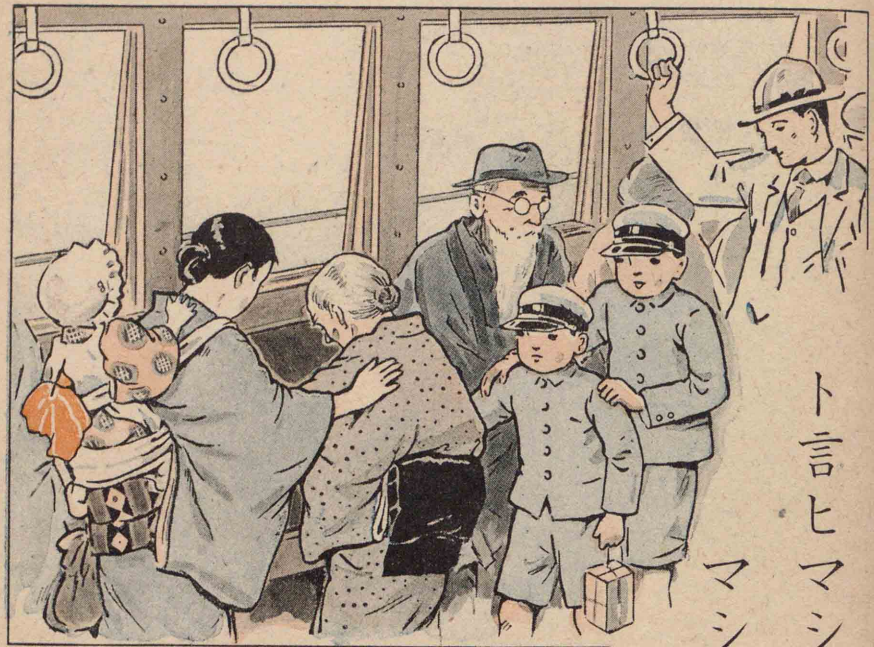
ト、ニイサンガ言ヒマシタカラ、私ハカケマシタ。

次ノ停留場テイリウヂヤウヘ來タ時、ヲヂサンハ、ソコデ下リ

ルノカト思ツタラ、下リマセンデシタ。

ソレカラニツ三ツ停留場ヲ過ギテ、表町マデ來マスト、人ガタクサン下リテ、席ガアキマシ

タ。ヲヂサンモ、コ、デ下リマシタ。ニイサ
 ンハ、私ノトナリヘカケマシタ。
 シカシ、入レ代リニ、大ゼイノ人ガドヤ〜ト
 ハイツテ來マシタ。席ハミンナフサガツタ
 上ニ、立ツテ居ル人モ、タクサンアリマシタ。
 一番後カラハイツテ來タノハ、七十グラキノ
 オバアサント、赤チヤンヲオブツタヲバサン
 トデシタ。スルト、ニイサंगा、小サイ聲デ、
 「立タウ。」



ト言ヒマシタ。私ハウナヅキ
 マシタ。

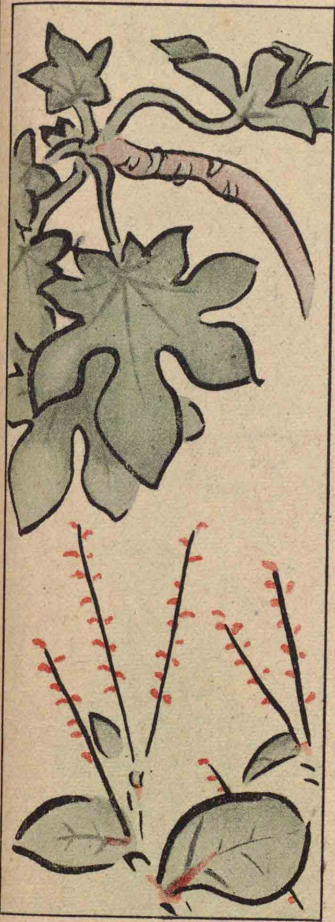
オバアサントヲバ
 サंगा、チヤウド私
 タチノ前へ來タ時、
 私タチハ、スグ立ツ
 テ、席ヲユヅリマシ
 タ。二人ハ、喜ンデ、
 「ドウモ、アリガタ

ウゴザイマス。

ト言ヒナガラ、テイネイニオジギヲシテ、カケ
マシタ。

電車ハ、又動キ出シマシタ。

二十四 水引草



やつでのかげで、

ふつと見つけた赤い花。

細長い、

こよりのやうな赤い花。

三本並んで、

さびしいけれど、かはい、花よ、

花の名は、

何と言ふのか知らないが。

水引草と、

名を聞いてから来て見たら、

いつの間にやら、

色がすつかりさめて居た。

二十五 二つの玉

魚

昔、ほてりのみこと火照命とほをりのみこと火遠理命といふ兄弟の神様が
ありました。兄の火照命は、毎日海へ出て魚を

獣

取り、火遠理命は、山へ行つて、鳥や獣を取つて
いらつしやいました。

或日の事でした。火遠理命は、兄神の所へお
出でになつて、

狩

「にいさん、かうして、毎日々々、二人で同じ事
ばかりして居ても、おもしろくありません。
いかゞでせう、けふ一日だけ、あなたは山へ
狩りに行き、私は海へ魚を取りに行く事に
しては。」

とおつしやいました。

兄神は、なかく御承知になりませんでした。

けれども、命みことがあまりおすゝめになるので、

「それでは、けふは山へ行つてみよう。お前は海へ行くがよい。」

ととおつしやつて、釣針と弓矢をお取代へになりました。



命は、喜び勇んで、海へ釣りにお出かけになりました。けれども、魚は一匹も釣れず、その上、大切な釣針ま

で、魚に取られておしまひになりました。

兄神は、弓矢を持つて、山

へ狩りにお出でになりましたが、

これも、鳥一羽、獣一匹取る事が出来ず、きげんを悪くしておかへりになりました。

願

命は、兄神の所へお出でになつて、釣針をなくした事を申し上げて、いろくおわびになりました。しかし、兄神は、どうしても、おゆるしになりませんでした。

そこで、命は、御自分の劔をくだいて、五百本の釣針をお作りになりました。さうして、

「これをさし上げますから、ごかんべんを願ひます。」

とおつしやいましたが、兄神は、やはりおゆる

仕

しになりませんでした。

今度は、千本の釣針を作つて、お上げになりました。しかし、兄神は、

「もとの針を返せ。外のは、何本持つて来てもだめだ。」

とおつしやつて、どうしても、おゆるしになりませんでした。

命は、仕方なく、もとの海べへ来て、泣いていらつしやいました。そこへ、一人の年とつた神

様がお出でになつて、

「どうなさいました。」

とお尋ねになりました。

命は、兄神の釣針をなくして困つて居る事をお話しになりました。すると、其の神様は、

其 教

「それは、お困りの事でせう。私が、よい事を教へて上げます。」

とおつしやいました。さうして、命を小舟に乗せて、

此

殿

「今、此の舟をおし出しますから、しばらく目をつぶつていらつしやいませ。間もなく、きれいな御殿へお着きになります。それは、海の神様の御殿です。其の門のわきには、井戸があつて、そばに、一本の大きな木があります。それに上つて、待つていらつしやいませ。海の神様が、きつと、あなたによい事を教へて下さるでせう。」
とおつしやいました。

命は、間もなく、海の御殿にお着きになりました。なるほど、門のわきに井戸があつて、そばに大きな木がありました。命は、木に上つて、待つていらつしやいました。

しばらくすると、門の内から、一人の女が出て來



百二十一

汲

ました。水を汲まうとして、ふと井戸の中をのぞくと、美しい神様のお姿が、すみきつた水にうつつて居ます。女は、びつくりして見上げました。命は、静かに、

「水を一ぱい下さい。」

とおつしやいました。女は、すぐ水を汲んで、命にさし上げました。さうして、此の事を海の神様に申し上げました。

海の神様は、しばらく考へていらつしやいま

内案

したが、

「それは、きつと、天の神様にちがひない。」

とおつしやつて、急いで行つてごらんになると、はたしてさうでした。大そうお喜びにな

つて、命を御殿の中へ御案内なさいました。

それから、御殿では大さわぎでした。天の神

様がお出でになつたといふので、毎日々々、海

の世界の珍しいをどりをしたり、おいしいご

ちそうをしたりして、命をおもてなしになり

樂

ました。

命は、月日のたつのも忘れて、楽しくお暮しに

なつて居ましたが、或日、ふと兄神の事を思ひ

出して、思はず大きなため息をなさいました。

海の神様が、それをお聞きになつて、

「あなたは、今ため息をなさいましたが、海の

世界が、おいやになつたのではありません

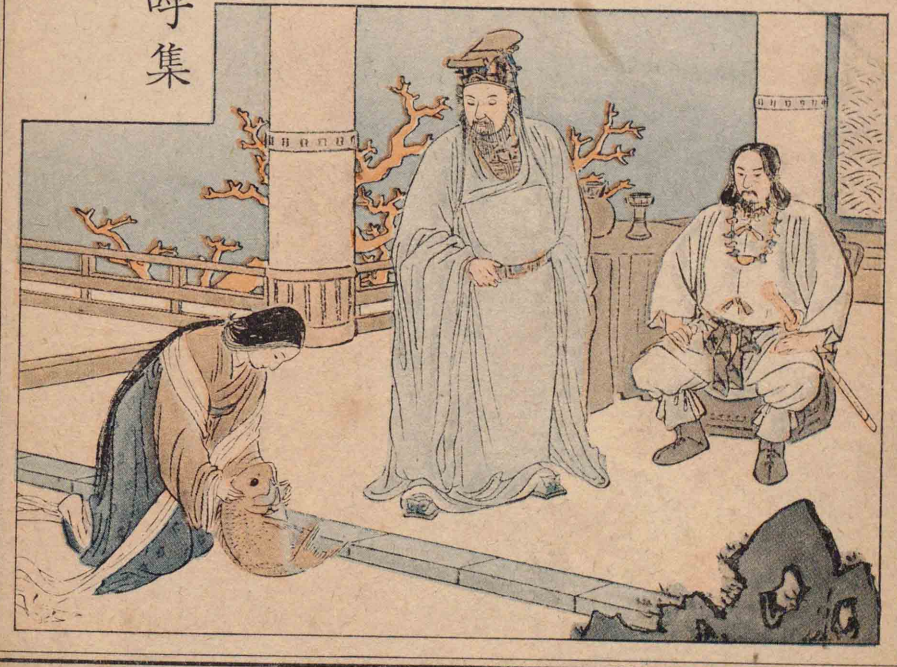
か。それとも、何か御心配でもあるのです

か。」

配

とお尋ねになりました。

命は、兄神の釣針をなくした事を、くはしくお話しになりました。すると、海の神様は、海に住んで居る魚を、残らず呼集めて、



尋國五

鯛

「誰か、天の神様の釣針を持つて居る者はな
いか。」

とお聞きになりました。魚どもは、聲をそろへて、

「存じません。しかし、此の間から、鯛が何かのどにさゝつて、物がたべられないで困ると申して居ます。きつと、あれが取つたのでございませう。」と申し上げました。

満

さつそく鯛を呼出して、のどをさがしてごらんになると、はたして釣針がひつか、つて居ました。で、すぐそれを取り出し、きれいに洗つて、命にお上げになりました。命は大そうお喜びになりました。

命がおれいゝをのべて、かへらうとなさいますと、海の神様は、二つの玉を出して、

「此の一つは、しほみつ玉と申して、これを水につけると、たちまち海水が満ちて来て、一

面

恐

面の大水となります。今一つは、しほひる玉と申して、これを水につければ、どんな大水でも、たちまち引いてしまひます。此の二つの玉をさし上げます。これさへあれば、どんな悪者が来ても、少しも恐れる事はありません。

とおつしやいました。

命は、此の玉を持ち、大きなわにぎめに乗つて、もとの海べへおかへりになりました。さう

して、兄神に釣針をお返しになりました。兄神は、大そうお喜びになつて、

「どうもありがたう。ほんたうに、むりな事を言つてすまなかつたね。」

とおつしやいました。

其の後、命は、二つの玉で悪者どもを平げ、よく國をお治めになりました。

夏	眺	植	片	殘	午	岡	京	屋
僕	廣	者	存	園	役	町	父	明
桐	靜	蟲	荷	居	場	奥	泳	暗
井	續	皮	甲	扇	馬	置	頭	考
暑	積	病	乙	鼻	列	食	尾	或
益	工	粟	品	蛇	杉	桶	萬	鏡
顏	階	莖	淺	閉	林	意	過	根
咲	匹	姿	蠶	卷	坂	飲	胸	鳴
誰	絲	荒	頃	投	腰	劍	破	葉
帽	糲	夫	桑	浮	煙	血	短	底
記	柿	客	棚	管	社	刃	息	感
曜	傳	暮	又	旅	古	鯉	岸	御
晴	安	皆	田	商	散	照	叫	同

起涼砲雷丈鈞孫治汝皇位事相
問承峯我戰陣幾淚實電席言表
魚獸狩惡願仕其教此殿汲案樂
配鯛面恐

終

尋國五

昭和十四年十一月四日 修正印刷
昭和十四年十一月七日 修正印刷
昭和十四年十二月十九日 翻刻發行

著作權所有

著作兼
發行者

文
部
省

小學國語讀本卷五 尋常科用
定價金拾四錢

昭和十四年十一月八日
文部省檢査濟

發行所

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
東京書籍株式會社
翻刻發行 代表者 石川正作
兼印刷者

印刷所 東京書籍株式會社工場

